

〔教育実践研究〕

地域基礎看護学実習終了後のレポート分析からみた学生の学び

片岡 三佳 普照 早苗 松下 光子 藤澤 まこと

Analysis of Learning in the Student's Reports of
“Community-based Fundamental Nursing Practice”

Mika Kataoka, Sanae Fusho, Mitsuko Matsushita, and Makoto Fujisawa

I. はじめに

地域基礎看護学講座は、家庭や地域で生活する人々の生活援助を基盤とした看護学の基本概念と方法を追究する基礎的講座として、地域基礎看護学概論、地域基礎看護方法、地域基礎看護学実習、地域基礎看護学卒業研究などを主な授業科目としている。地域基礎看護学には、基礎看護（継続看護）、公衆衛生看護、訪問看護、精神看護の4つの領域が含まれている。教員はこれまでの教育経験において、基礎看護学、地域看護学、精神看護学といった分野のとらえ方に慣れており、「地域基礎看護学とはいかなる学問か」という新しい概念構築および教授内容・方法の精選を検討する必要があった^{1,2)}。そこで、理論と実践の統合の場である地域基礎看護学実習における学生の学びに注目した。なぜならば、地域基礎看護学実習は地域基礎看護学の特性を反映しており、そこでの学生の学びを明らかにすることで、地域基礎看護学講座での教授内容を検討する際の示唆を得ることができるのではないかと考えたためである。

本学では、入学当初の1年次4月から、各看護学領域の概論がいつせいに開始され、1・2年次の2カ年間で各看護学領域の概論・方法の授業が終了する。3年次になると、4月中旬から11月中旬まで、学生を大きく3つのグループに分け、地域基礎看護学、育成期看護学（小児・母性分野）、成熟期看護学（成人・老年・産業保健分野）の実習がローテーションで行われる。

地域基礎看護学実習の目的・目標は表1に示すとおりである。地域基礎看護学実習は、科目としては、「地域基礎看護学実習1（実践と理論の統合1）」・「地域基

礎看護学実習2」・「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」の3科目から構成されている。「地域基礎看護学実習2」は、公衆衛生看護、訪問看護、精神看護の3領域の現地実習である。

「地域基礎看護学実習1（実践と理論の統合1）」では、地域基礎看護学実習の目的・目標の確認と「地域基礎看護学実習2」に向けたオリエンテーションの実施、知識の確認、現地の実習で出会う場面のロールプレイング演習など現地の実習に向けての準備を整える。「地域基礎看護学実習2」は、公衆衛生看護・訪問看護・精神看護の施設や病棟などで実習を行う。「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」は、各学生が3領域の現地実習で体験した看護を振り返り、地域基礎看護学実習の目的・目標に向かって看護のあり方と看護活動についての理解を深める機会としている。具体的には、表2に示したように、学生は4グループに分かれて、各グルー

表1 地域基礎看護学実習の目的・目標（平成16年度）

目的

生活の営みの中で人々の健康を支えるための看護活動を実地に体験し、看護実践に必要な基礎的能力を培うとともに、社会における看護の特質を考える。

目標

1. 生活者としての対象の健康状態を総合的に理解することができる。
2. 健康状態の把握において、対象者の立場に立って生活を捉えることの重要性を理解することができる。
3. 看護援助においては、個人・家族・地域生活集団のもつ問題解決能力を高め、支援することの重要性を理解することができる。
4. 保健・医療・福祉などの専門職および地域の人々と協働活動の重要性を理解することができる。
5. 社会における看護の特質を考え、今後の看護活動の課題を検討することができる。

表2 地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）の目的と内容（平成16年度）

目的
各自が体験した看護についてディスカッションすることを通して、生活の営みの中で人々の健康生活を支える看護のあり方と看護活動、それらの活動の基盤をつくる看護学についての理解を深めるとともに、看護職の社会的使命について考える。
内容
1日目：オリエンテーション、グループ編成、グループディスカッション
2・3日目：グループディスカッション
4日目：発表準備、発表・ディスカッション、レポート作成
5日目：レポート集録作成・配布
※各グループには教員3名を配置し、グループディスカッションに参加している。

プでテーマを設定し、現地実習の体験をもとにディスカッションを行う。そして、各グループのディスカッションの経過を発表して共有・意見交換を行う。さらに、グループディスカッションの経過記録の作成、および地域基礎看護学実習の最終の個人レポートとして「地域基礎看護学実習のまとめ」のレポートを作成する。なお、平成16年度にディスカッションされたテーマを表3に示す。

地域基礎看護学実習が上記のような構造であることから、地域基礎看護学実習としての学びを明らかにするには、「地域基礎看護学実習1（実践と理論の統合1）」・「地域基礎看護学実習2」・「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」の3科目を体験したことにより学生が学んだことは何かを捉える必要がある。そのため、われわれは、「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」で最終的に学生が個別に提出する「地域基礎看護学実習のまとめ」のレポートを分析することで、地域基礎看護学実習での学生の学びが明らかになるのではないかと考えた。

今回、地域基礎看護学講座での教授内容を検討する際の基礎資料を得るために、地域基礎看護学実習での学生

の学びを明らかにした。また、地域基礎看護学実習は、育成期看護学実習、成熟期看護学実習とのローテーションの中に組み立てられることから、ローテーションによる実習時期によって学生の学びに違いがあるかどうかを検討した。

II. 方法

1. 研究対象

本研究の対象は、平成16年6月、7月、11月に「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」を行った学生が提出する各自A4用紙2枚程度にまとめた「地域基礎看護学実習のまとめ」のレポートである。分析対象は、了解が得られた79名（6月27名、7月26名、11月26名）の学生のレポート内容である。なお、6月にレポートを提出した学生は、地域基礎看護学実習が最初に体験する実習である。7月の学生は、成熟期看護学実習の後に地域基礎看護学実習を体験、11月の学生は、成熟期看護学実習・育成期看護学実習を体験した後、最後に地域基礎看護学実習を行っている。

2. 分析方法

「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」で提出された「地域基礎看護学実習のまとめ」のレポートの記述内容を繰り返し読み、各学生のレポート全文について、原則として1文ごとに区切って、そこで表現されている地域基礎看護学実習での学生の学びを、内容・語彙の意味を変えないように要約し、1つの意味・内容を1データとした。なお、明らかに学びではない部分や学びの意味がとれない文は分析対象外とした。データ抽出は、地域基礎看護学実習を担当している教員14名が各自1グループずつを担当して実施し、研究者間で再度、検討した。1データに要約された内容のうち類似するも

表3 地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）グループワークにおける話し合いのテーマ

前期（6月）	中期（7月）	後期（11月）
・生活者の問題解決能力を高める看護	・対象理解の大切さ	・対象者を生活者として捉えて、そこに关わる看護職としてのあり方を検討し、今後の課題を考える
・生活の営みの中で対象者の健康生活を支える看護のあり方	・生活者として捉えるとはどういうことか	・対象者の立場に立って生活を捉えるとは
・場が変わっても対象者は対象者でかわらない。だからいろんな手段を使って支えていくことが看護の特質	・人々が地域で健康に生活していくには、看護職はどのように関わっていくか	・生活の営みの中で人々の健康生活を支える看護
・対象の立場に立って生活を捉える	・地域で生活する人々の健康生活を支える看護のあり方	・「自己洞察」をキーワードに私たちが考えた看護

のをまとめてカテゴリ化していった。さらに、実習時期による特徴を捉えるため、6月にレポートを提出した学生のデータを実習前期（平成16年4月19日～6月11日）、7月に提出した学生のデータを中期（6月14日～7月30日）、11月に提出した学生のデータを後期（10月1日～11月19日）に分類した。なお、カテゴリ化にあたっては、地域基礎看護学の実習目的を大枠にして研究者間で合意が得られるまで検討を加え、地域基礎看護学講座内においても検討を行った。

3. 倫理的配慮

学生に対して、口頭と書面にて研究の目的・意義を説明し、個人が特定されないこと、拒否する権利があることや同意の有無が成績に関係しないことなどを説明したうえで、協力を依頼し、書面による意思表示を求めた。書面によって協力の意思表示が得られた学生のレポートを調査対象とした。

Ⅲ. 結果

地域基礎看護学実習における学生の学びは79名全員から抽出でき、1319件（一人当たりの平均は16.7件）であった。実習時期別にみると、前期547件、中期366件、後期406件で、【生活者としての対象の理解】【援助の方法】【連携・協働】【看護の特質と課題】【学生の自分への気づきと課題】という5つのカテゴリと32のサブカテゴリを抽出した（表4）。表5に記述例を、本文中の【 】内はカテゴリを、《 》内はサブカテゴリを表す。

1. 地域基礎看護学実習における学生の学び

1) 【生活者としての対象の理解】

【生活者としての対象の理解】は509件あり、《生活とは何か》《生活を捉えることの重要性》《生活を捉える方法》《生活者とは何か》《生活者として捉えることの重要性》《生活者として捉える方法》《対象理解の重要性》《対象理解の方法》《対象者の特性》《健康とは》の10サブカテゴリに分けた。

サブカテゴリのデータは、《生活とは何か》が61件、《生活を捉えることの重要性》が39件、《生活を捉える方法》が49件、《生活者とは何か》が11件、《生活者として捉えることの重要性》が14件、《生活者として捉える方法》が27件、《対象理解の重要性》が

表4 時期別にみた学生の学びのデータ数

カテゴリ名	データ数		
	前期	中期	後期
1. 生活者としての対象の理解			
1) 生活とは何か	37	20	4
2) 生活を捉えることの重要性	18	0	21
3) 生活を捉える方法	44	5	0
4) 生活者とは何か	5	1	5
5) 生活者として捉えることの重要性	7	6	1
6) 生活者として捉える方法	6	20	1
7) 対象理解の重要性	10	17	98
8) 対象理解の方法	20	75	17
9) 対象者の特性	57	9	1
10) 健康とは	0	4	0
データ数小計 (%)	204 (37.3)	157 (42.9)	148 (36.5)
2. 援助の方法			
1) 対象のもつ能力を高める援助	77	8	8
2) 意思を尊重した支援	38	37	37
3) 生活の営みの中での援助	3	6	8
4) 家族への援助	7	7	26
5) 社会全体での支援	5	4	9
6) 信頼関係形成の方法	1	6	0
7) 継続した援助	2	0	4
8) 将来を見すえた援助	3	1	0
9) 健康維持増進のための援助	1	8	1
データ数小計 (%)	137 (25.0)	77 (21.0)	93 (22.9)
3. 連携・協働			
1) 連携・協働の意義	78	13	16
2) 連携・協働の方法	3	8	0
データ数小計 (%)	81 (14.8)	21 (5.7)	16 (3.9)
4. 看護の特質と課題			
1) 看護とは	27	12	7
2) 看護職の役割	26	49	10
3) 看護実践における課題	41	11	7
4) 地域基礎看護とは	0	12	0
5) 看護の振り返りの重要性	0	0	7
6) 看護職に必要な能力	1	12	1
データ数小計 (%)	95 (17.4)	96 (26.2)	32 (7.9)
5. 学生の自分への気づきと課題			
1) 対象の理解について	5	3	8
2) 援助の方法について	9	1	0
3) 知識・技術の習得	4	4	8
4) 自己理解	5	4	86
5) 実習の意義	7	3	15
データ数小計 (%)	30 (5.5)	15 (4.1)	117 (28.8)
全体データ数合計 (%)	547 (100)	366 (100)	406 (100)

125件、《対象理解の方法》が112件、《対象者の特性》が67件、《健康とは》が4件であった。生活や生活者に関すること、それらを捉える方法、その重要性、対象理解の重要性や特性などを学生は学んでいた。

2) 【援助の方法】

【援助の方法】は307件あり、《対象のもつ能力を高める援助》《意思を尊重した支援》《生活の営みの中で

表5. 学生の学び (記述例)

カテゴリ名	記述例
1. 生活者としての対象の理解	
1) 生活とは何か	対象の生活は様々で、気候が関係していたり産業が関係していたりする地域性があったり、個人としてみれば生育歴や発達段階、ライフスタイルなどが関係しており、人それぞれである。
2) 生活を捉えることの重要性	その人の生活のなかで、その人らしさがあり、またその人の望む生活が現実のものとなるように関わっていき、生活を支えていくためには、対象者の生活を捉えることが必要である。
3) 生活を捉える方法	このように対象の生活を捉える要素はたくさんあり、自分から見た対象をそのまま自分の判断で捉えるのではなく、対象の生活要素を把握し、対象にとってそれがどのような意味を持つのか、何を大切にしているのかを考え、統合して、対象について理解する必要があると考えた。
4) 生活者とは何か	それぞれのライフスタイルをもっているということや、その人の時代背景がある、生活の場がそれぞれあるということ、それぞれの経済状況がある、それぞれの価値観をもっているなど、さまざまなのが生活者です。
5) 生活者として捉えることの重要性	「地域に住む人を生活者として捉える」これは地域で活動する看護職が、常にもっていなければならない重要な視点である。
6) 生活者として捉える方法	生活者を捉える視点としては、対象の価値観、ライフスタイル、問題対処能力や健康状況などという対象者本人の中にある対象者を形成する要素の把握から、家族関係、その世帯の経済状況やその地域の特性などの対象者を取り巻く環境の要素の把握が必要であり、さらにそれらの要素を統合してトータルのみにみていく姿勢が必要不可欠である。
7) 対象理解の重要性	＜看護＞看護職が一方的な考えで働きかけることがないように、住民や地域の特性、文化を踏まえたうえで、住民の立場にたって看護職の考えを対応させていくことが重要だと考える。
8) 対象理解の方法	地域で生活している人は、健康状態、健康意識、ライフスタイル、価値観などを持っており、それらは人それぞれ違っている。それらは、対象者が長年生きてきたなかで確立したものである。対象者にとってはそれが当たり前であり、ひとつひとつの行動には意味がある。だから、看護師は対象者を把握するためにさまざまな角度から観察し、対象者の生活や考え方などを捉え、そして対象者にあった看護を提供していかなければいけない。
9) 対象者の特性	住民は今後の健康問題よりも、現在の生活における身近な困難を問題と感じている場合が多く、看護職者の捉える将来的な健康問題と差がある。
10) 健康とは	「健康」という言葉の意味は、単に健康障害や疾病がない状態を指すのではなく、「健康障害や疾病を持ちながらもその人が望む生活が送れる」「身体的な健康が維持・増進されることだけでなく、精神的・社会的にも満たされている」ことも指しているのだと学ぶ事ができた。
2. 援助の方法	
1) 対象のもつ能力を高める援助	看護職者側がすべて援助してしまうのではなく、対象者が自分でできることは対象者が自立しておこなえるよう関わっていく。
2) 意思を尊重した支援	対象者の意思表示能力の把握をし、対象者の意思が出せる環境を整え、意思を理解し、対象者の状態に合わせた対応をしていくことが大切であると思う。
3) 生活の営みの中での援助	生活の一部一部を見るのではなく、対象者の生活は24時間続いているものなのだとすることを念頭に置きながら、対象者の病気の段階やレベルに合わせて対象を尊重した援助をしていくことが重要であると考えた。
4) 家族への援助	家族に対しては、本人の状況について正しい理解を促し、本人と家族のつながりを大切にする。
5) 社会全体での支援	連携・協働には、対象者の生活を実際に支援することと、その環境を整えていくということがあり、対象者の生活は看護職だけでなく、地域ぐるみで支えていかなくてはいけないと思いました。
6) 信頼関係形成の方法	その人を一人の人間として捉え対象の存在を認めること、そしてその中で、看護職が対象にとって信頼を持って相談できるような相手であると認められることが重要である。
7) 継続した援助	そのためには住民の目的と看護者の目的をお互いに理解し進めていくこと、住民が意見を言える場を作ったり、事業を行うことで高まった健康に対する意識を一時的なものにしないようにするために継続して関わっていかなければならないと考える。
8) 将来を見すえた援助	今の生活が、対象のこれからの健康にどう関係していくかを考え、未来を見据えた関わりをしていくことが大切だということに気づいた。
9) 健康維持増進のための援助	情報提供や「健康教室」のような予防的なかわりをしていくことで、住民の健康への意識を高めていくことが大切であると考えた。
3. 連携・協働	
1) 連携・協働の意義	保健師だけで援助していくには対応しきれない部分もあるし、障害についての対応や就学についての専門的なことについては、より専門の職種があるので、そういった他職種と連携していくことで、対象にとってのよりよい援助につながっていくと考えた。
2) 連携・協働の方法	対象に関わる人がひとつのチームとしてうまく連携していくためには、それぞれの専門職の役割を理解し、お互いに尊重していけるような関わりをもつことが必要だと思います。

表 5. 学生の学び（記述例）（つづき）

4. 看護の特質と課題	
1) 看護とは	対象のニーズにより合った援助をするためには、今ある社会資源を有効に活用しながら、対象の特徴やレベルを考慮し個別性を考えた援助をし、地域全体で支えていくことが看護のあり方であるとする。
2) 看護職の役割	生活している人は生きている人であり、時間は絶えず時を刻んでいる。だから、対象者に対する看護は一定で変化のないものであってはいけない。対象者は絶えず変化し続けているのだから、それに伴って対象者に対する看護も変化させていかなくてはならない。対象者にあった看護を提供するためにも、対象者の変化に伴って看護を変化させていくためにも、豊富な知識と技術と柔軟な頭を持ち、より対象者が対象者らしい生活を送れるような看護を提供していかなければならない。
3) 看護実践における課題	対象に対するケアを考えた時、対象自身の視点や看護の視点だけが必ずしも良いとは限らない。グループワークの発表でも出たようにどんなケアが対象にとって一番良いかは分からない（そもそも、一番良いケアというものがあるのかさえも分からない）。これから先も人と関わり続け、対象の大切な人生の一部を共有する身として、対象に対する様々な視点の中で、対象にとって必要なケアは何なのかを考え続けることが大切なのではないかと考える。
4) 地域基礎看護とは	「地域」は人々が住む場という物理的な意味合いだけでなく、そこにある社会的資源やサービスを利用したり、人々と関わっていくことで一人ひとりの生活を成り立たせることができる、そうした場のことではないかと考える。
5) 看護の振り返りの重要性	実習先の精神科病棟では、患者の病状に応じて、病院側が以前行っていた代理行為や私物管理を減らしたり、日課の中でも選択が可能なもの（例えば間食）は個人の判断で行えるようにしていた。これは看護職者が自ら看護と称して行っていた行為を振り返り、患者の病状ごとの臨機応変な対応が可能であると判断して行われたものであり、そのように可能なところから改善していこうとする姿勢が重要ではないかと考えた。
6) 看護職に必要な能力	看護職者自身が客観的な自分や自分の看護観を知っておく必要があると思う。
5. 学生の自分への気づきと課題	
1) 対象の理解について	私は対象者の健康状態を病気の面だけを見てしまい、本来の姿を捉えることができていなかった。
2) 援助の方法について	他の領域では問題解決能力を高める看護とはどういうことか、今のこの考えをこれからの実習を通して、発展させていきたいと思う。
3) 知識・技術の習得	看護職は豊富な知識と技術が必要で、さまざまな事例に対応できるように常に自分の技術を高めていかなければならないし、知識を得ていかなければならないと感じた。
4) 自己理解	この実習では対象者をみることの大切さも学んだが、対象と向き合っている自分自身をみつめることも大切だということに気づくことができた。
5) 実習の意義	実習では実際に自らがいたり、聞いたりした体験から、講義で学んだことをより深く理解することができたと思う。

の援助》《家族への援助》《社会全体での支援》《信頼関係形成の方法》《継続した援助》《将来を見すえた援助》《健康維持増進のための援助》の9サブカテゴリに分けた。

サブカテゴリのデータは、《対象のもつ能力を高める援助》が93件、《意思を尊重した支援》が112件、《生活の営みの中での援助》が17件、《家族への援助》が40件、《社会全体での支援》が18件、《信頼関係形成の方法》が7件、《継続した援助》が6件、《将来を見すえた援助》が4件、《健康維持増進のための援助》が10件であった。対象および家族、地域社会全体への援助・支援方法や、継続した長期的な時間軸を考慮した支援の方法などを学生は学んでいた。

3) 【連携・協働】

【連携・協働】は118件があり、《連携・協働の意義》《連携・協働の方法》の2サブカテゴリに分けた。

サブカテゴリのデータは、《連携・協働の意義》が107件、《連携・協働の方法》が11件あり、より良い援助につながる他職種との連携・協働の意義や方法などを学生は学んでいた。

4) 【看護の特質と課題】

【看護の特質と課題】は223件あり、《看護とは》《看護職の役割》《看護実践における課題》《地域基礎看護とは》《看護の振り返りの重要性》《看護に必要な能力》の6サブカテゴリに分けた。

サブカテゴリのデータは、《看護とは》が46件、《看護職の役割》が85件、《看護実践における課題》が59件、《地域基礎看護とは》が12件、《看護の振り返りの重要性》が7件、《看護に必要な能力》が14件であった。看護とは、地域基礎看護とは、といった看護の本質や、看護職の役割や振り返りなどの看護職にとって必要な姿勢を学生は学んでいた。

5) 【学生の自分への気づきと課題】

【学生の自分への気づきと課題】は162件あり、《対象の理解について》《援助の方法について》《知識・技術の習得》《自己理解》《実習の意義》の5サブカテゴリに分けた。

サブカテゴリのデータは、《対象の理解について》が16件、《援助の方法について》が10件、《知識・技術の習得》が16件、《自己理解》が95件、《実習の意義》が25件であった。学生自身の気づきとそこから検討された課題を学生は学んでいた。

2. 実習時期別にみた地域基礎看護学実習における学生の学び

地域基礎看護学実習における実習の各時期による学生の学びは、実習の時期に関係なくデータ数が最も多かったカテゴリは【生活者としての対象の理解】であった。また、【援助の方法】の《意思を尊重した支援》は、実習の目的・目標の中には記述のない言葉であるにもかかわらず、実習前期38件、中期37件、後期37件と各期にデータが存在した。なお、実習時期による特徴は以下のとおりである。

1) 実習前期

実習前期の学びの件数は547件と、中期366件、後期406件に比べて多かった。その中で、データ数が最も多かったカテゴリは【生活者としての対象の理解】(204件)であったが、【生活者としての対象の理解】のうち《健康とは》、【看護の特質と課題】の《地域基礎看護とは》《看護の振り返りの重要性》に該当するデータがなかった。

2) 実習中期

実習中期では、データ数が最も多かったのは、前期と同様に【生活者としての対象の理解】(157件)であったが、【生活者としての対象の理解】のうち《生活を捉えることの重要性》、【援助の方法】の《継続した援助》、【看護の特質と課題】の《看護の振り返りの重要性》に該当するデータがなかった。また、中期においてのみ【生活者としての対象の理解】の《健康とは》のデータが見られた。

3) 実習後期

実習後期では、データ数が最も多かったのは、前期・中期と同様に【生活者としての対象の理解】(148件)

であったが、後期で特徴的であったのは、【学生の自分への気づきと課題】が他の時期と比べて極端に多かったことである。前期30件、中期15件に比して、後期では117件もあった。一方、後期では【生活者としての対象の理解】の《生活を捉える方法》《健康とは》、【援助の方法】の《信頼関係形成の方法》《将来を見すえた援助》、【連携・協働】の《連携・協働の方法》、【看護の特質と課題】の《地域基礎看護とは》、【学生の自分への気づきと課題】の《援助の方法について》に該当するデータはなかった。

IV. 考察

1. 地域基礎看護学実習における学生の学び

学生の学びの内容には、【生活者としての対象の理解】【援助の方法】【連携・協働】【看護の特質と課題】【学生の自分への気づきと課題】があった。地域基礎看護学の講義の中で重要視している概念である生活者としての対象理解、個人、家族、地域生活集団を対象としてみる対象の広がり、看護過程、援助方法、ケアチーム作り、対人関係および対人関係における自己理解、看護の特質などについては、学びの内容として述べられていた。このことは、1、2年次での「地域基礎看護学概論」や「地域基礎看護方法」といった講義での学びをもとに、公衆衛生看護・訪問看護・精神看護など多彩な施設や病棟、地域や在宅などで臨地実習を行い、各自が体験した看護についてグループでディスカッションを通したことで得られた知識と実践が統合された結果であると言える。また、看護についての理解を深める機会である「地域基礎看護学実習3(実践と理論の統合2)」の効果であったと思われる。

特に地域基礎看護学実習における学生の学びの特徴として、“生活者としての対象理解”、さらには“個人、家族、地域生活集団を対象としてみる対象の広がり”、“対人関係における自己理解”があるように思われた。なかでも“生活者としての対象理解”の学びは最も多く、サブカテゴリには、《生活とは何か》《生活を捉えることの重要性》《生活を捉える方法》《生活者とは何か》《生活者として捉えることの重要性》《生活者として捉える方法》など、“生活”“生活者”に対するさまざまな視点からの学びがあった。関連して《対象理解の重要性》

《対象理解の方法》の学びも多かった。地域基礎看護学実習では自宅、医療・福祉施設、行政機関など様々な場で実習を行っていることから、学生の対象理解の内容には、個人のみならず、“個人、家族、地域生活集団を対象としてみる対象の広がり”があった。また、“対人関係における自己理解”は地域基礎看護学の実習目的には掲載されていない学びであった。しかしながら、対人関係をベースに展開される看護において自己理解は不可欠であり看護実践、および自身の実践を自己評価し改善していくために必要な基礎的能力ともいえる。それを学生自身が自分で実感できたことは重要な学びであったといえる。これらの学びは、基礎的学習科目を教授する地域基礎看護学における学修内容として、重要であると考えられる。

一方、地域基礎看護学における学修内容と関連して捉えられた検討課題として次のことが挙げられる。まず、【援助の方法】の《意思を尊重した支援》は、地域基礎看護学実習の目的・目標の中には記述のない言葉であるにもかかわらず、各期に存在し、記述数も多くその内容も多岐にわたっていたことは新たな発見であった。おそらく学生は、今回の実習体験だけではなく、1、2年次での講義や演習などを経験し、それらが蓄積した形で実習に臨んでいるため、それが学びとなって実習後の記載に至ったものと考えられる。対象者の意思を尊重するということは、看護においてのみでなく、日常生活において当然なすべき態度ではある。今回の分析によって、「看護職として対象者の意思を尊重することとは」ということを意識的に考えていたことが改めて分かったため、学生が記述している意思を尊重するということがどういう意味なのか、なぜその問いが出てくるのかを十分検討し、そのうえで実習目的・目標や1、2年次の学習内容を考える必要がある。

また、【連携・協働】は、《連携・協働の意義》《連携・協働の方法》の2サブカテゴリのみであり、記述数も118件と他のカテゴリの記述数と比較して少なく、記述内容も「他職種との連携がより良い援助につながる」「対象のニーズに合った援助のため看護職が社会資源の情報を得る」といったように誰がどのように行うのかといった具体的な記述がなく抽象的な内容が多かった。このことは、学生自身の学びとしても漠然としていること

が伺われた。連携と協働という言葉の定義、連携・協働の相手の多様性など、教員側もこの言葉の示す内容を明確にする必要がある。

さらに、対象者の疾患と生活との結びつきに関する記述がほとんど見られていないように思われた。特に【生活者としての対象の理解】での《対象理解の重要性》《対象理解の方法》《対象者の特性》のサブカテゴリには、疾患とそれに関連する生活における障害の結びつきが具体的に学びの中で表現された記述はなかった。しかしながら、実習では体験として学んでいることが予測される。まずは学生の疾患とそれに関連する生活における障害との関係について、地域基礎看護学実習において学びがなかったのか、レポート上に表現されていないことなのか、どのように認識しているのかを確認し、教員側としても、より意識して疾患、障害、生活を結びつけて考えられるように、関わっていく必要性が感じられた。

2. 実習時期別にみた地域基礎看護学実習における学生の学び

実習時期によって、「地域基礎看護学実習3（実践と理論の統合2）」のグループワークで決定するテーマ性に特徴があり、学びのデータ数は、そのテーマに添った形で影響が見られた。

例えば、実習前期のグループワークのテーマ（表3参照）を見ると、4グループともに生活者である対象者とはどういう存在かを知り、それに見合った看護を考えようとしている内容であるため、結果にも挙げたように、とりわけ【生活者としての対象の理解】というカテゴリのデータ数が多かったものと思われる。実習段階の初期であるために、まずは自分がこれから初めて関わろうとしている対象者とはどのような存在であるのかを知る、ということが焦点化されていたのではないだろうか。

実習中期の学生では、既に成熟期の対象者の実習を体験してきており、ある程度、対象者のイメージが描けているため、今度はより深く対象者を生活者として捉えようとする視点や、病院・施設ではなく、地域で生活する対象者へのアプローチを考えようとする視点へとテーマ性に変化があったと考えられた。また、今回は中期の学生においてのみ《健康とは》という学びのデータがあった。これは、グループワークのテーマによる影響とともに、地域基礎看護学実習直前に成熟期領域の病棟実習を

体験したことで、健康レベルが高く特定の疾病を持たない地域住民をも援助の対象とする公衆衛生看護分野の実習およびストレングスを活用する精神看護領域の実習において、「健康とは」が強調され、改めて「健康とは何か」を問い直す機会があったからではないかと思われた。

さらに、実習後期の話し合いのテーマが「『自己洞察』をキーワードに私たちが考えた看護」であったために、この時期の学生は、【学生の自分への気づきと課題】というカテゴリにデータが特に多かった。おそらくそれは、他領域の実習も終え、自分の実習体験全体を締めくくるこの時期だからこそ、これまでの自分の言動や行為を反省し、今回のグループワークが振り返るよい機会となったからであろうと予測された。

V. 今後の展望

地域基礎看護学実習における学生の学びは、1、2年次の地域基礎看護学概論や地域基礎看護方法といった講義での学びから領域別実習へと繋がっていることが再確認された。また、3年次領域別実習においては、地域基礎看護学の講義の中で重要視している概念を学生は学んでいることから今までの教授内容を支持するとともに、地域基礎看護学実習の目的・目標に掲載されていないにもかかわらず学生の学びから抽出された《意思を尊重した支援》などを、キーワードとして地域基礎看護学実習の目的・目標に加えるかどうかの見直しが必要であると思われた。

また、今回は実習全期間のうち地域基礎看護学実習を体験した学生に焦点を当て、その時々における学びを抽出したが、学生が約半年間の実習を通して学ぶことによる個々の成長過程についても、その時期の学びの特徴を明らかにすることで教育的かわり方にさらなる工夫ができるのではないかと考えられた。そのため他領域を通して学びの経過を追っていくことも必要ではないかと考えられる。

研究対象として分析を行ったレポートは、平成16年度の学生に限定されていること、学生の体験をあらわしているもののグループワークで設定したテーマによる影響を多少なりとも受けており、学生の学びを理解するには十分であるとはいいがたい。今後とも、講義・演習などでの学生の学びを継続して検討し、地域基礎看護学実

習などにおいて学生と共に考えることで、地域基礎看護学の概念構築、教授内容・方法の精選に努めていく必要があると考える。

謝辞

本研究にあたり、ご協力をくださった学生みなさまに感謝します。また、お忙しいなか分析および検討にご援助を下さった地域基礎看護学講座、看護研究センターの教員の方々に深謝いたします。

文献

- 1) 岐阜県立看護大学自己点検評価委員会：岐阜県立看護大学自己点検評価資料－開学3ヵ年の活動評価－，11-13，2003.
- 2) 岐阜県立看護大学：自己点検評価－平成15～16年度－，25-31，2005.

(受稿日 平成19年10月31日)

(採用日 平成19年12月21日)